

あおぞら

発行：愛知県被災者支援センター
住所：名古屋市中区三の丸 3-2-1
愛知県東大手庁舎 1階
TEL：052-954-6722
FAX：052-954-6993
開館：月～金 10～17時



ゆっくりお過ごしいただけましたか ～くつろぎの時間 1泊2日温泉交流会～

今年は愛知県への登録避難者の約3割にあたる334名のご参加を得て、文字通り「大」交流会となりました。受け入れていただきました三河湾リゾートリンクスのご担当者も、「これだけ多くの団体様をお迎えしたのは初めてです」と語られるほどの盛況ぶりでした。当方スタッフも全員参加し、皆様方の交流の輪に加えていただきました。その会話の中で、本企画の意義を再確認させていただくことができました。まずは、「長い避難生活から、疲労もピークに達し、何かと気苦労が多い日々の中で、温泉に浸かってゆっくり過ごすことができた」ということ。また、「育児などでなかなか時間に余裕がなく、同じ境遇の避難者ともしばらく会えずじま이었다が、『大交流会で会おう』と申し合わせて、久しぶりにゆっくり話ができた」ということ。さらには、「愛知での就職も決まり、家族のために一生懸命働いている。しかし、1時間の通勤時間のふとした瞬間に、『なんで俺はここにいるんだろう』と気がめいる時がある。でも同郷の仲間や支援していただいた人たちと会って、愛知でも頑張ろうと再び力が湧いた」ということ…

東日本大震災から3年が経ようとしています。皆様方お一人おひとりの置かれた状況や今日に至るまでの筆舌に尽し難い過程は、当方支援者側には到底理解し得ない複雑な想いでいられることは承知しています。しかし、それでも、お一人おひとりがそれぞれの将来を確かに歩んでいただきたい、そのために何ができるかを考えていきたいと思うのです。それには、まずは身体と心をゆっくり休めていただくこと、そして誰かとじっくり話をすること、一人で



ぼーっとする間が大切だと考えました。本企画がその一助となったならば幸いです。

今回は、地元西尾市や社会福祉協議会、観光協会、NPO等からの全面的なご支援を受けました。心より御礼申し上げます。中でも、高校生を含む104名もの方々が託児ボランティアなどに尽力いただきました。子どもたちがお兄さん・お姉さんと一緒に遊ぶ様や大きなバルーンアートを大切に持ち帰る姿を見るにつけ、子どもたちにとってもこの2日間はとても楽しいひと時であったことがわかります。この子たち一人ひとりの笑顔と健やかな成長が、私たち共有の財産です。大きくなるにつれ、今度はボランティア側にまわることがあればいいと、期待が膨らみます。

末筆ながら、本企画にご協力いただきましたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

今回残念ながらご参加いただけなかった皆様も、また別の企画でお会いしたいと思います。愛知県被災者支援センターは、これからも皆様のそばに居続けたいと思っています。

(愛知県被災者支援センター
センター長 栗田 暢之)

〈くつろぎの時間 1泊2日温泉交流会〉

○ ふるさとサポーターとして活動して

今回で3度目の大交流会、毎年楽しみに家族で参加させてもらい、良い思い出を毎回作らせてもらっています。

今回は初めてのスタッフとしての参加で、ちょっと緊張気味でしたが、以前主人がしていた仕事と全く同じようなお仕事だったのでとても懐かしく、そしてこの楽しさを全て捨ててきたのだと改めて感じました。

人と話す事は嫌いじゃないので、知った顔の方がいらっしゃれば“○○さん”と声をかけ、初めての方にも優しく声かけをさせていただき、初めてこられる方の緊張をどれだけ減らせたかは分かりませんが、私の中ではとても充実した受け入れが出来たのではないかと思います。

交流会には去年の大交流会の反省も生かして、たくさん話の輪ができていました。私はつい初めての方と話し込んでしまい、サポーターとしてのお仕事ができなかったと反省しました。

最後に今回の大交流会全般で思った事は、やはり最初の受け入れの流れがとてもよく、その効果が1泊2日続いていたと感じました。私は受付にずっといたので、4階での皆さんが声かけをして下さったのだと、感謝の気持ちでいっぱいでした、そして愛知県被災者支援センターの皆さんにはいつも大変なご準備の中このような会が成り立っている事、心から感謝いたします、ありがとうございます。

(岡本 早苗 名古屋市熱田区 在住)



○ ふるさとサポーターとして活動して

一泊二日の温泉交流会にふるさとサポーターとして微力ですが、一人でも多くの人に心からリラックスして楽しく交流して欲しいと思いながら参加させていただきました。

私と一緒にふるさとサポーターとして準備をしてくれたのは、震災後に出会い、共に様々な思いを共有しながら歩んできた人達です。

未曾有の出来事の中で私達親子は戸惑い・悩みながらここまで来ましたが、同じ立場の人達との出会いは私達にとってかけがえのないものとなりました。

「分かるよ…」と寄り添い、同じ立場の私達にできることをこれからもしていけたらと思っています。

前に進む為のことを考えながら、心をオープンにして語り合うことができたでしょうか…そんなお手伝いできていたら嬉しいです。

愛知県被災者支援センターの方々・ボランティア・その他大勢の方々の支援や協力で、私自身も楽しませていただきました。本当に感謝です。ありがとうございました。

(根本 美佳 豊川市 在住)

○ ふるさとサポーターとして活動して

矢のごとく。楽しく。慌ただしく。惜しむように過ぎて行きました。三河湾リゾートリンクス 2月1日～2日一泊二日温泉大交流会は113世帯。334名の参加者と託児ボランティア、相談窓口専門家、主催スタッフ含め約150名と経験したことのない盛大な交流会だったのだと思い返しているところです。

わたしは打ち合わせや事前準備から参加させ



ていただく機会を得ました。昨年の12月からの打ち合わせで知ることになった「縁の下の力持ち」。愛知県被災者支援センター、愛知県、西尾市、西尾市社会福祉協議会、西尾市観光協会、やらまいか人まちサポート、南医療生協病院、迎え入れてくださった三河湾リゾートリンクス。当日子どもたちと遊んでくださった、名古屋YMCA、高校生のみなさんもいらっしたこと。書ききれなくて申し訳ないのですが全ての皆様に思いを巡らせて改めて今、心から感謝しております。

わたしたち避難者スタッフ数名は、「ふるさとサポーター」として赤いバンダナをして受け付けの周辺で、スタッフの皆様と共に受け付けでお出迎えをさせていただいておりました。

東日本大震災を機に愛知県へ避難してきた私たちには、抱えた戸惑いと悩みは震災から3年を迎える今、意図しない所で多岐にわたりはじめています。日々の生活は待ったなしで、子どもを持つ家庭であれば、日常は子ども優先に日々はめまぐるしく、日々背中を追われるように過ぎていっているのではないかと思います。子育て世代ではなくとも、老若男女心のおきどころはどこにあるのだろう。

少しずつ何かを背負って前に進むしかない現実実は夢でも幻でもない、いつもいつも、この一瞬。まさしく今なんだと思います。ふるさとサポーターとしては、自分自身に何ができたのかわかりませんが、今後もこういう横のつながり



は大事にしたいと思いました。

温泉へおいでになったみなさんは、さまざま持った思いを何で癒しましたか？ いち参加者として、今回とてもうれしかったのは子ども同士の交流で、楽しそうにしている子どもの姿でした。転校を余儀なくされてから、人前には出たがらないわが子たちが震災から3年目を迎える今、少し変化を感じ取れたことです。願わくば今はしまっている思いを語り合う日が来ますように。

(鈴村 ユカリ 名古屋市天白区 在住)



○ わいわい・がやがや交流・相談タイム

いかがでしたか?!

今回の相談会は昨年 8 月（春日井）の「パパ・ママ・キッズ☆ゲンキ・すまいる」企画での子ども健康相談会以後、2 回目の相談会となります。

一口に健康相談と言っても、一人ひとりの抱えている問題は多義にわたり、現在や、これからの生活全般にわたる問題であるということが、昨年の企画から学んだ教訓です。それで今回は、放射線や食生活を含む保健医療、子育てや家族のくらしや仕事への不安、損害賠償、人権などの幅広い問題に対応する専門家 17 名の方に参加していただきました。相談会の方法は、個別相談と専門家集団が複数で対応しワイワイがやがやのテーブルを設けて一緒に悩みを共有し話し合うという 2 つの形式です。相談者の方は 30 名でした。

避難者でつくる「ふるさとサポーター」に会場で誘われて相談会に参加された方は、「だれに、どこで相談したらいいかわからなかったが、今回話ができて良かった」とのこと。一人ひとりの悩みを解決する糸口が少しでもみつければ… とこれからも避難者の方と一緒に相談会を続けていきたいです。お疲れ様でした。

（わいわい・がやがや交流・相談タイム
担当 仲田 法子）

○ 温泉交流会の相談会に参加して

名古屋に住んでいる私も、吉良吉田そして今回の会場は初めてでしたが、その眺望のよさにまず感動。オープニングのあと、相談コーナーで放射線担当の澤田先生の所で相談している方の話をいっしょにうかがい、このあと医療の個別の相談の方が 2 人ありお話をうかがいました。

共通の心配は甲状腺のことでしたが、私は外科で甲状腺の知識もあり、知っている限りで対応させていただきました。全体の会場に入ったときも思いましたが、小さいお子さん連れの若い方が多く、大変な思いをして避難されてきたことがよくわかりました。子どもさんの甲状腺はこれからどうなっていくか、ということが大きな問題だと思います。もし甲状腺癌の発症が増えてくるようなら、広島長崎の経験から、チェルノブイリの経験から、大人の方も含めて他の様々な疾患が増えてくる可能性があります。内部被曝の影響については、この先何十年とみていく必要があると思いますが、そのための健康チェック体制はないのが現状だと思います。

今回、わずかな人とお話しただけでしたが、皆さんの心配は共通していると思います。今後も皆さんの心に寄り添って行動していきたいと思います。

（総合病院南生協病院 外科医師 矢吹 賢）



○ 医療という立場で

医療という立場で相談会に参加させていただきました。

一時間半という短い時間で、臨床心理士の方々と一緒に3組の方の話を聞かせていただきました。身体症状の話から始まり、ストレスや恐怖という負荷のかかった心の問題を切々と話されました。愛知県に避難され日常の生活を維持しながら、震災による心身の問題を誰にも相談できずにいること、被災地から避難してきたことを知られたいくないと気丈に生活していることなどを知ることができました。

ただ聴くことしかできませんでしたが、話をしてくださった方は臨床心理士の存在に喜ばれ「話せて良かった」という表情でした。

被災された方たちの心が癒されるというよりは、時間がますます抱えているものを増強させるのではないかと思え、あらためて、今何ができるのか、少しでもお役にたてることあるだろうかと考えさせられる時間でした。

(総合病院南生協病院 看護師 星原 美保子)

○ 温泉大交流会に参加して - 愛知県臨床心理士会 -

2月1日に行われた温泉大交流会に、愛知県臨床心理士会から3名で参加させていただきました。相談コーナーにて、「健康・暮らし」(看護師、食品検査の専門家と同席)、「健康・放射能」(医師・放射能の専門家と同席)、「子ども・家庭」(個別相談)に分かれて、3名でのべ7名の方のお話をうかがいました。地震・津波被害を受けられた方、原発事故から避難してこられた方など、背景はさまざまでしたが、大変な状況の中、慣れない環境のもとで、みなさんがそれぞれ頑張ってくれたことがよくわかりました。

震災から3年近くが過ぎたこの時期になって、体調やお子さんしたことなどに心配が出てきたという方もいらっしゃいました。その背景として、さまざまな不安やストレスが関わっているように見受けられました。時間が経っているのに、フラッシュバックや症状が出ることへのとまどいも語られました。しかし、生活の基盤ができて落ち着いてきたからこそ、そのような心の反応が出せるようになったと考えられます。安心して話せる場があり、そういったことがわかるだけでも、落ち着いていただけると感じました。心配なことを家族や周囲の人に話して支えあうことが大事ですが、専門家に相談できる機会も、これからもまだまだ必要だと思いました。

(愛知県臨床心理士会 坪井・中村・永田)



〈くつろぎの時間 1泊2日温泉交流会〉

○ “託児ボランティア” をコーディネートして

「ワッハッハ」「キャッキャッキヤ」子どもたちの楽しそうな笑い声、「ワイワイ・ガヤガヤ」子どもたちが楽しそうに走り回る姿、ほっと一安心できた瞬間でした。

平成26年2月1日・2日に行われた「くつろぎの時間、1泊2日温泉交流会」の開催地、西尾市で特定非営利活動法人の活動をしている私は、託児ボランティアのお手伝いをさせていただくことになりました。この交流会の参加者予定数をお聞きした時に100世帯300名（子どもが70名程度）ということでしたが、その後150世帯400名（子どもさんが100名程度）だという事で、これは大変だと直感しました。1番目に子どもの安全確保、2番目に4時間の託児活動の間に子どもが飽きることなくどの様に過ごすか、3番目に屋内での遊び場について、4番目に交流会場と託児場所の配置と導線などについてでした。

子ども2名に対して最低でも1名の専属のボランティアをマッチングすることや屋内・屋外で子どもが自由に選択できる遊びの種類を確保するために大勢のボランティアが必要だと思い、以前より交流のあった西尾東高校の生徒や紙芝居、バルーンアート、図画工作、読み聞かせ、プラレールなどで子どもの相手ができるボランティアグループなどへ協力の声かけを行いました。

今回の交流会の趣旨に賛同をいただき、高校から51名、西尾市内の7グループ、個人参加5名の総勢104名のボランティアの確保にたどりつくことができました。これで子どもたちの安全確保

と遊びの提供はなんとか目途ができましたが、屋内の遊び場と導線についての課題は残ったままでした。当初予定していた屋内の遊び場は交流会場と隣接していますがキャパが狭く、混雑するだけではなく、対応も不十分になる事が目に見えていました。

そこへ救いの声がホテルの担当者からありました。改装準備で使用していない別棟の施設の提供でした。そこは仕切りもなく十分な広さが確保できる空間であり、それに加えてすぐ下のビーチにも近く申し分のない場所でした。これでイメージしていた環境を整える事ができ交流会当日を迎えられました。

これらの課題をクリアできたのも参加していただいたボランティアのみなさんや三河湾リゾートリンクスのスタッフのご協力があったのことに感謝しています。

私たちの暮らす西尾市もいつ災害が起きるかもしれません。今回参加していただいたボランティアのみなさんも日々のボランティア活動が、仮に災害が発生した時にもみなさんのスキルや活動が必要とされます。今回の経験がいかされ避難所や仮設住宅などでもご活躍していただける事を期待しています。

最後になりましたが、今回の交流会に参加された方は勿論、ご都合で参加できなかった方も再び西尾市においていただく事をお待ちしています。

（特定非営利活動法人 やらまいか人まちサポート
理事長 牧野 明広）



○ “託児ボランティア”を通して思うこと

託児ボランティア活動が始まったのは、震災直後の緊急支援が一段落した後、地元で何か支援ができないかと私たちが募金活動を毎月11日に実施していた頃、愛知県被災者支援センターから、「今度イベントをするので、子どもを預かって大人がゆっくりと相談や交流ができるようにしたい。YMCAには普段からボランティアリーダーがいて、子どもを対象に活動しているのでぜひ手伝ってほしい」という依頼を受けたことからでした。

被災地には行けないが何かボランティアをしたいという大学生や高校生の声を聞いていたので、双方のニーズに合致し、YMCAの得意分野でもあることから、この“託児ボランティア”は始まりました。

以来、年に5〜6回のお手伝いですが、子どもとボランティアもお互い顔なじみにもなり、再会を楽しみにしてくれる子どもも増えました。

この託児ボランティアもそうですが、普段のYMCA活動からも思うのは、やはり若者と子どもは相性がいいということです。学齢期の子どもたちにとって高校生や大学生は良きお兄さんお姉さんであると同時に、高学年になるほどリーダーを一つのお手本、ロールモデルとして見るので、自分もこういう活動してみたいとか、あんな人になりたいとか感じるようです。青年



たちにとっても、ついこの間まで自分も子どもだったので、子どもの欲求や気持ちがわかるでしょうし、すぐに同じレベルになって遊べるので、子どもたちも本気で遊ぶことができるのだと思います。

今回吉良町での一泊交流会では、地元西尾東高校の生徒が、ボランティアとして約50名参加されました。若い人たちに、地元でも震災支援としてできることがあることを知ってもらい良い機会だったと思いますし、子どもと楽しく過ごすのもなかなか大変なことだということも体験してもらえたことと思います。

これを機会に、若い人たちがもっともっとボランティア活動に参加してもらえることを期待しています。

(公益財団法人 名古屋 YMCA
ボランティアセンター 所長 坂本 清則)



〈くつろぎの時間 1泊2日温泉交流会〉

2013年度 くつろぎの時間 1泊2日温泉交流会 アンケートから 〈回答数 94件／参加世帯数 113世帯〉
アンケートを内容別に抜粋してまとめると、以下ようになります。(数は延べ数)

(編集上、くです・ます調等を)簡略化して引用させていただきましたので、ご了承ください)

◎初めての参加(17件)…同じ体験をした人や同じような考えの人と意見を交わせた、という初参加の方々の、同様な感想が他にもありました。

今まで同じ体験をした方と話したことがなかったので、とてもリラックスでき、もっと早く参加すればよかった / 今回初めて交流会に参加してもらい、たくさんの方々とお話できました。放射能、原発に対する情報を交換することもできて、お互いにはげまし合うことで元気を頂いた / 最初は母子避難で、父親代わりになんでも頑張ってきて、こんなにくつろげた時間を初めて過ごせた

◎交流会に満足(58件)…話せたことが元気がつながった、というご意見が多くありました。

同郷出身の方と4人も知り合えた / 心あたり疲れがとれた。笑顔になっている自分に気づき嬉しくなった / 田舎を知る人たちと共通の話題で話せることが良かった / とてもリフレッシュできて、また明日から頑張れる / まだまだ終わりの見えない避難生活、お互いに心を通わせて支えあっていきたい / こうやって愛知県の人への優しさに触れたことで、一人で悩まなくてもいいんだと感じる事ができた / 愛知県内にこんなに避難している人がいると思うと、とても心強い!! / 今回はとくに避難元が同じ方々とゆっくりとお話できて、とても充実した時間を過ごすことができた / 近くのテーブルからふるさとの言葉が聞こえてくるだけでも、私たちにとっては交流 / 家が近所だったのに今回はじめて知って、電話番号を交換しあったりで、楽しく過ごす事ができた / 同郷の方と色々とお話できて、普段中々話せない内容〈原発の事等〉の話ができて、スッキリした。参加して良かった / これまで同じ地域の家族と交流する縁が少なかったが、今回地元や近辺の家族と再会もかねて2年ぶりにお話しできた。原発避難者は、

社会とは違う、そこだけの特殊なしくみにより、同じ悩みを抱き、世間への後ろめたさ、世間体を意識、気疲れをしている部分が共通して、本音で話せた / 被災者の状況をふまえ、今回の原発事故を、原発・放射性物質に対する考え方を国民全体で検証し、どのような国にするのか、支援をしていただいている方々にも考えていただきたい / 今一番不安な放射能のことを皆に話した。知らず知らずにストレスがたまっていたのかなあ / 被災者ならではの声を世の中に発信していく事が、被災者の勤めではないだろうか

◎ホテル・宿泊に満足(食事・部屋・風呂)(45件)…ホテルでの1泊交流会はゆっくりできて、また食事等もよかったと大変好評でした。

ホテルの居心地、景色素晴らしく、避難の方たちと充実した時間が過ごせ、明日からまた頑張れる / 足をのばして入る大浴場のお風呂…気持ち良かったー!足をのばしてねられるベッド…気持ち良かったー!なつかしい福島のフラガールを、ショーを見て思い出した。心あたり疲れがとれた。笑顔になっている自分に気づき、嬉しくなった / 色々な問題は沢山あるけれど、今夜ばかりはこの素敵なホテルで英気を養い、明日からの活力にしたい。今は生きていて良かったと心から思う

◎託児に満足(23件)…託児のおかげで、安心して交流ができた、と大変喜ばれました。

子どもたちを見て頂き、ゆっくりすることができた。 / 託児が充実しているので、充分大人同士の話が出来た / 我が家は2歳、0歳(7ヶ月)の子どもがいる為、あまり出かけることを控えていたが、今回は託児があり大変助かり、同じ子連れの方たちも多く、安心して参加できた / 交流会の時には、息子を夜の遅い時間まで預かって頂き、大変感謝 / なによりも、子どもたちが新しい友達が作れたよと、楽しい笑顔で



話してくれたことがよかった / 子どもたちは大変楽しい時間を過ごす事が出来た。子どもが笑顔で過ごす事が、何よりもうれしい

◎次回も参加希望(27件)…大交流会の継続は多くの方が希望されています。

1年でたった一回の大交流会は、私達にとってとても大切な交流会になり、毎回新しい仲間や以前からの仲間との交流を深めるものとなっている。どうか毎年続いていける事を、心からお願いしたい

◎相談会・その他…前向きに生きていきたい、という声が多数発せられています。

親身になって相談にのっていただき、ずっと抱えていた不安が少し楽になった / 震災から3年、現状は全く改善しておらずまだまだ厳しいが、前向きに考えられる機会となった / いつまでも“被災者”とばかりは言っていられないが、皆さんの支えを力に、少しずつ前に進んで行かなければいけないと思っている / 同じ境遇の方々が身近な所にこんなにいらっしやると思うと、これからの生活にも力が湧いてくる / 3年の月日が流れようとする中、色々な思いで生活をしてきたが、こちらの生活にも徐々に慣れようとしている時間の中で、震災と向き合える時間になった / 何か機会があったら、私もぜひボランティアに参加してみたい

◎「ふるさとサポーター」の方のアンケートから

☆今回は、多くの方が「交流しよう、交流したい」という想いをもっているように感じました。3年経って、少しずつ心の余裕ができてきたり、自分の苦しみと同じように、他人の苦しみが理解できる人が増えてきたのかなと思います。私たち自身をそうならいいなあと思いました。ただ、お酒が入ると、本音がポロリ…で、それによって傷つく人もいたようです。なかなか根も深く、難しい問題はいつまでも続くのだと思います(後略)。(K)

☆「ふるさとサポーター」として、積極的に初めて参加する方と交流することができたのが、一番嬉しかったことです。初めて参加する方は、やはり自分が参加してもいいものかと悩まれている方が多いのが印象的でした。でも、「もっと早く参加すればよかった!」という声を聞けると、「一歩踏み出せたからもう大丈夫!」と、こちらも嬉しかったです。(中略)夜の女子会も、本当に楽しかった。震災がなければ決して出会う事のなかった人たちと、笑いがあり、時に真剣に本音をぶつけ合うことの出来る関係を築けていることに、不思議な感情が湧いてきます。起きてしまったことを嘆くのではなく、事実から学び、気づき、そして前進していく強さを、自分もみなさんから与えてもらっていることに、感謝の気持ちでいっぱいです。(後略)(S)

☆「ふるさとサポーター」を少しお手伝いさせて頂きました。気にしている人々に声をかけてみると、「交流会は初めてだし、知り合いもないので、どうしたらいいですかね?」という方もちらほらいて、少しお話ししたり、同郷の輪に入ってみたりとすることが、とても意味があったなあ実感しました。そういえば、私も交流会で知り合いがいない時、スタッフの方が同じ地方の人を紹介してくださったおかげで、今の私のネットワークがあります。心にたまっていたものも話すことで出せたら、心身ともにリフレッシュ、いいことですよ。今回、これで交流できた人がいればいいなあ。(後略)(N)

『第18回お茶っこサロンなごや@南区』に参加して

1月19日に行われた「お茶っこサロンなごや」に子どもと参加してきました。今回の会場は南区笠寺駅の近くにある、日本ガイシスポーツプラザでした。

とても寒い中、ボランティアの方が駐車場の近くで「お茶っこサロンなごや」の案内板を持って立って下さっていました。プールやスケート場もある大きな施設で、案内がないと入り口にも困るくらいなので、とても助かりました。

会場の和室近くで、大きなひまわりのゆるキャラ「MIIO(ミオー)」が、ニコニコ笑顔で迎えてくれ、子ども達は大喜びで抱きついて離れませんでした。

会場に入ると、久々にお会いするIさんご夫婦も参加していて、一緒にお話できてとても嬉しかったです。

始めに、南区の名所旧跡のお話があり、笠寺観音、昔から伝わる「猩々(しょうじょう)」という伝説の生き物?の紹介があり、保存会の皆さんによる「猩々」も登場。部屋の天井に届きそうな大きな「猩々」を見て、子ども達は逃げ回りました。「猩々」の持つ、大きな手のような棒でおしりを叩かれると病気にならないと聞き、大人は子ども達を行かせようとしますが、泣いて嫌がる子も…

そんな「猩々」はつくるのにとっても手間がかかるため、後継者が少なくなり存続が危ぶまれているそうです。古くからの人々の思いがっ

まった「猩々」を、ぜひ若い人達で引き継いで欲しいなと感じました。それと同時に、自分の地元にも伝わるものにも興味がわきました。子どもと一緒に調べてみようと思っています。

その後は南区の有名な和菓子屋の花びら餅をいただき、節分用に「鬼のお面づくり」をしました。最後に「鬼のお面コンテスト」もあり、子ども達は恥ずがったり、喜んだり…皆がゆるキャラ「MIIO」のように笑顔いっぱい楽しんでいました。

今回もたくさんのボランティアの方々がサポートして下さいました。私はほぼ毎回参加していますが、毎回顔をみる方もいて、頭が下がる思いと、感謝の気持ちでいっぱいです。

私も、いただいたサポートを、自分のできることで、お返ししていきたいなと感じています。そして、子どもにも、その思いを伝えていこうと思います。

(山本 由香 名古屋市南区 在住)

※今後の「お茶っこサロンなごや」のお知らせ※

☆ 3月 30日(日)10:00~14:00

千種区 東山動植物園

名古屋市に避難されている方であれば、どなたでも参加できます。母子だけでなく、ご夫婦、父子での参加もあります。ほぼ毎回初参加の方もいますので、お気軽にご参加下さい。



「防災について考える会」を幼稚園 PTA にて開催しました

1月20日、娘が通園する幼稚園にて「防災について考える会」と称して避難者と保護者のお話会を開催しました。私が役員を務めており、兼ねてから自主避難者であること・原発事故や食の安全についてなどを話しており、これをPTA主催のイベントとして何かできないかと役員会で相談したところ、避難者の生の声が聴きたいという事になり、講演会では堅苦しいのでお茶とお菓子を囲むお話会としました。

当日は宮城県亘理郡・福島県富岡町・福島県郡山市・埼玉県さいたま市・千葉県松戸市の5名の避難者の方にお越しいただき、保護者の参加者は25名ほど（役員含む）でした。

まずはお一人ずつ皆さんの前で当日の状況と避難の経緯をお話いただきました。思い出して涙を流される方もおり、またそれを聞いて涙を流される保護者あり…その後避難者お一人と参加者5名前後のグループに分かれおしゃべりタイム。どのテーブルも皆さん真剣に質問や相談で盛り上がり予定時間を大幅にオーバーする事となりました。その会の中だけで終わらせてしまうのはもったいない！という事で議事録も作成しました。保護者向け図書コーナーに置かせていただき興味ある方にお渡しする予定です。

生の声を聞くことでリアルに震災を体感し、

ご家族で防災について話し合ったり、被災地・被災者に想いを馳せる機会になっていたらいいなあと思います。

すでに参加者の感想からは「家に帰ってすぐ防災リュックを点検した」「食糧・おむつのストックを用意した」「ニュースで見ていたけどどこか他人事だった。初めて防災に備えようと思えた」など嬉しい言葉が返ってきています。

正直、自画自賛ですが大成功かなと思っています。こんなにしっかり想いが伝わる事、そんな人たちと同じ幼稚園で過ごせることをとても有難く思いました。

みなさんもよかったら幼稚園・小学校などで開催してみてもはどうでしょうか。思わぬところで仲間が広がることもあるかと思っています。

今回も「実は当時関東にいて…」という人や「実家が東北で、当時何も出来ず辛かった」など、普段は話せないこともたくさん話すことが出来ました。

今後は避難者同士だけでなく地元の人たちとも食の安全子どもの健康などを考えていけたらさらに素晴らしいなと考えています。

最後に、今回ご協力いただいたゲストの皆様および愛知県被災者支援センターには深く感謝いたします。

（増田 奈緒子 名古屋市名東区 在住）

支援センターからのお知らせ

愛知県被災者支援センターでは、朝日新聞（当日朝夕刊）、中日新聞（当日朝夕刊）、東京新聞（前日朝夕刊）、岩手日報（数日前朝刊）、河北新報（数日前朝刊）、福島民報（数日前朝刊）、福島民友（数日前朝刊）をお読みいただくことができます。

原則、支援センターの下記の開館日時であれば閲覧可能ですが、会議や作業などでご遠慮いただく場合もありますので、お越しいただく前にご連絡いただくとありがたいです。

愛知県被災者支援センター
名古屋市中区三の丸3丁目2番1号
愛知県東大手庁舎 1階
利用時間 月～金 10:00～17:00
（土・日・祝・12/29 - 1/3 休）
TEL : 052-954-6722 FAX : 052-954-6993

- ・地下鉄名城線「市役所」駅（2番出口）から徒歩3分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅から徒歩3分
- ・基幹バス「市役所」停留所から徒歩5分
- ・とよやまタウンバス「県庁前」停留所から徒歩5分

「外国人のための防災教室」

2014年1月に県内3箇所で開催された「外国人のための防災教室」を（公財）愛知県国際交流協会と岡崎市、（公財）豊橋市国際交流協会、犬山市との共催で開催しました。3日間とも、愛知県被災者支援センターよりご紹介いただいた外国人の方に東日本大震災の体験談をお話していただきました。

18日の岡崎市図書館交流プラザ“りぶら”で行われた教室で話をされたのはフィリピン国籍のナバルロ・ロベルトさんです。ロベルトさんは福島県で被災され、地震の被害だけでなく原発の不安にもさらされたことなど、詳細に語っていただきました。

当時、お風呂に溜めてあった水を使ってしのいだことから、現在は常に水と、非常食としてお菓子などを保管しているというお話はとても参考になりました。今回の防災教室をきっかけに、りぶら館内で行われている日本語教室を知ったことや、参加されていたフィリピンの方と知り合いになれたことを喜んでいらっしゃいました。

25日の豊橋市民センターでは、韓国籍のオム・ミソンさんに、被災者支援センターの瀧川さんが、インタビューするという形式でお話を伺いました。

小学生から「地震が起きたとき、家に一人でしたらどうしたらいいか」という質問に、「あまり怖がらないで、トイレにはあまり落ちてくるものはないからそこに避難して」など、恐怖心を煽らないように、時には笑いも交えながら話されました。大変な体験をしたけれど、明るく、前向きに生きていきたいと話す姿が印象的でした。



オム・ミソンさんと 瀧川さん

最後の教室は犬山市観光センター“フロイデ”で行われました。この日、語っていただいたのはキラトン夫妻です。夫のロデルさんはフィリピン国籍、妻の由起さんは日本人です。当時、ロデルさんは来日したばかりで石巻市で被災され、津波が迫る様子や、家族の安否が分からず不安な時間を過ごしたことが、由起さんは介護施設で働いている最中に津波に襲われ、利用者を助ける中で夫のことを思っていたことなど、緊迫した状況を話してくださいました。

日本語が十分に分からない状況で情報も入りにくく、どれだけ不安な日々を過ごしたであろうということが伝わって来るそれぞれのお話に、参加した方たちも真剣に耳を傾けていました。

災害に備える様々な工夫をお聞きできただけでなく、つらく悲しい経験を乗り越えて、新しい土地で生きていくその姿には大変勇気付けられたのではないかと思います。

（公益財団法人 愛知県国際交流協会）



ナバルロ・ロベルトさん



キラトン夫妻

いきがい

あの日（3.11）から、もう3年が経とうとしております。あの日まで、少なからず幸せと思って暮らしていたのに、悪夢の様な出来事で180度人生が変わってしまいました。受け入れ難い現実に、呆然とするだけで、何も考えられず鬱々とした日々を過ごし、生きていく気力さえも消失して、パソコンを開いては自殺のスポットばかりを探しておりました。

そんな時、息子の嫁の父親が、「お母さん（私の事）蒲郡ではね、65歳になると無料でスマートフォンを貸してくれるよ。お母さんなら十分その資格あるので申し込んでみたら」（当時は私は74歳でしたから、十分すぎるくらいの年齢）、と言ってくれましたが、その時はただ何となく聞き流しておりました。また数ヶ月が経ったころに、「お母さん電話しましたか？」と尋ねられて、「忘れていました」、と返事しましたところ、「もう少しで締切りになるので早く電話をしてみたら」と、電話番号が書いてあるメモを渡してくれました。思い切って電話をして、数日後“iPhone”を手に入れました。見るのも触るのも生まれて初めてでしたから、さあいざ使ってみようと思いましたが、操作方法がわかりません、そんな時インストラクターの方が無料で使い方を教えてくれる教室があるというので、毎週金曜日の午後に“iPhone”教室に通いました。そうしたらとても面白くてすぐ夢中になりました。

そして昨年2月被災者温泉交流会（蒲郡での開催）に参加して、お国訛りに接し涙が溢れ

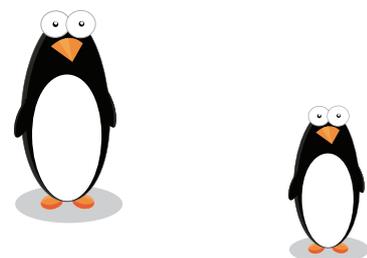
ました。孤独な魂は私だけではないと言う思いを感じ、夜遅くまで話し合いました。自己紹介で私は岩手県の盛岡市、そこではパッチワークの教室を開き教えていた事、盛岡の芸術祭にパッチワークを出展3回の受賞をした事などを話しました。

その事がきっかけで、名古屋市総務局から電話がありました。「被災者の方のための教室を企画しているのでボランティアで講師をしてほしい」、との依頼でした。「私でよかったら是非」と承諾しました。名古屋市の鶴舞通いが始まり、水を得た魚のように元気を取り戻しました。愛知県に来てやっと、自分のライフワークとしていたパッチワークに、また携わる事が出来る喜びを感じ始めております。

iPhoneとの出会い、パッチワークが出来る喜び、愛知県被災者支援センターの方たちの支え。何よりも地域の皆さんの支えには、心から感謝しております。もしかして人生のゴールが目前かもしれませんが、生かされた命を大切に、自分の“いきがい”に向かって皆さんのお役に立てるように、支援センターからの自立をめざして、頑張りすぎずに行こうと思います。

そして、私のいきがいとなるiPhone教室の先生、教室の仲間、支援センターの多くの方々に、心からの感謝をしたいと思います。これからも良い作品を制作し、多くの方の勇気になれるように、一歩ずつ歩んで御恩をお返ししたいと思います。

（似内 成子 蒲郡市 在住）



名工大 寺子屋 NIT 報告書

私たち名工大ボランティア部は、毎月 2 回名古屋工業大学（名古屋市昭和区御器所町）にて、小学生以上高校生以下の学生を対象に個別学習塾形式の『寺子屋 NIT』という勉強会を無償で開いています。

☆ 寺子屋 NIT の背景

私たち名工大ボランティア部は、生まれて初めて身近に起きた歴史的な大震災である、東北地方太平洋沖地震に衝撃を受け、その後すぐに、震災関連のボランティア活動を通して、被災者の方々の支援がしたいと思い、設立しました。

しかし、名古屋工業大学は理系の大学であり、ボランティア部に集った学生は、実験、研究など忙しく、長期休暇を除いて、現地まで行き支援することは難しい状況でした。

そのとき、東北地方太平洋沖地震後、子どもと一緒に愛知県に避難した家族は、新しい環境に慣れるのに忙しく、子どもは前の学校との学習カリキュラムの違いに戸惑っている子が多いと聞き、「学習支援ならば現地ではなく愛知で、かつ直接支援することができる！」と考えて寺子屋 NIT を立ち上げました。

寺子屋 NIT の業務は、主に次の 3 点です。

- (1) 小、中、高の学生の勉強のお手伝い
- (2) 学校環境の相談
- (3) 受験制度の進路相談

子ども達にとって、学校は生活の基盤の一つになります。しかし、新しい学校での学校環境、学習状況の違いは、その基盤にとっても大きな不安を与えます。そんな不安も抱えながら、家庭の環境も新しくなり、親に不安を打ち明ける機会も減ってしまうでしょう。私もそうだったのですが、不得意な教科の先生ほど高圧的に感じ

てしまい、また出来ない部分を親にあまり見せたくはありませんでした。

だからこそ、同じ学生の身分である私たちが、子ども達とフランクに話し合い学校環境の不安を解消し、勉強のコツを教えることで、子ども達の不安を自信に変えることが寺子屋 NIT の目的になります。

☆ 寺子屋 NIT の現状

寺子屋 NIT は、月に 2 回、土曜日に行っており、日程は約一カ月前に決定します。時間は事前のご連絡に合わせて開催します。勉強に使う教材は、生徒自身に持ってきてもらい、それを中心に勉強を教えます。初めての参加する生徒には、親と一緒に来てもらい、寺子屋の雰囲気を見てもらいながら、勉強や受験面に関する相談を受けます。以降生徒が慣れ次第、一人参加してもらう流れになっています。

現在の主な生徒は、小学生 1 人、中学生 2 人、高校生 1 人と少ないながらも、定期的に参加頂いています。中高生は、慣れたこともあり、一人で電車を使って参加頂いています。前回勉強した記録を取っておりますので、勉強担当となる先生が変わったとしても、支障なく学習のお手伝いができるようになっております。また、参加される生徒の輪が広がるように、「東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや」が開催している『お茶っこサロンなごや』などの他の団体の活動を手伝いながら、宣伝もしております。

問合せ・申込先：名工大ボランティア部

TEL：090-9896-1290（坂川 泰章）

E-mail：nit.vpr@gmail.com

（名古屋工業大学 機械工学科 坂川 泰章）